



## 山城 (ヤマグシク)

### 山城の変遷

山城は、うるま市の西方天願川上流域に位置し、かつてはヤマグシ(ス)クと呼ばれた。王国時代には、越来間切から美里間切と変わり、戦前は美里村、そして戦後の昭和二十年には石川市の行政区となり、さらに平成十七年四月一日の二市二町の合併により「うるま市石川山城」とその変遷は激しい。数十年前までは山城の周辺は山林地帯で、時々イノシシも出没するような交通不便なところで炭焼きも行われていたという。昭和十年ごろから集落西方の山を開墾し茶の栽培をはじめ、現在でも「山城茶」として県民に愛用されている。

### 圧倒的に多い山城姓

山城姓は、県内各地に広く分布しているが本市の山城は、住民のほとんどが山城姓であることで知られている。『石川市史』に一九八七年三月の字の戸数が二六一戸、そのうち山城姓が

二五二戸という記述がある。実に字の九七%が山城姓ということになる。一村落到同姓がほとんどということでは混乱がなかったかと気になる。ところが、従来の屋号やワラビ名で通用したと考えられる。山城に山城姓が圧倒的に多いのは、山村ゆえに他地域との交流が少なく、また屋取など他地域から流入が少なかったため山城姓がそのまま引き継がれてきたと考えられる。

現在は国道三二九号のバイパスが走り、周辺にはレジャー施設もでき、他地域からの移住もあって、姓にも多少の変化が見られる。それでも二〇〇八年NTTハローページ収録の山城の個人名簿をめぐると二四五箇所のうち一九〇箇所ほどが山城姓で八十%近くになる。

山城姓はかつて「ヤマグシ(ス)ク」と呼ばれていたが、特に昭和十年代ごろから就職や社交上、あるいは生徒の学校生活などで不都合ということで珍姓や難読、難解な姓を改正する動きがあつてヤマグシクはほとんどがヤマシロと大和風に改められた。

### 山城の意味

県内には、字名として本市の山城をはじめ糸満市の山城、久米島町の山城があり、ヤマシロ・ヤマグシク・ヤマグスクなどと呼ばれている。山城は、

いずれも丘陵上の山手か、その周辺に位置することから「山」の地名がつけられたと考えられる。グシク・グスクについてはいろいろ論争があるが、ここでは聖域を含めた一つの集落といえる。このことから本市の山城は、伊波や周辺地域から見て「山手の方にある集落」といえるのではないかと。なお、先述の『シマの民俗(上巻)』石川市山城(ヤマグシク)『山城正雄著』には、山城の意味について「山中の住まい(緑の住みか・緑の家)」とある。

## 楚南 (スナン)

楚南は「楚南山城」と呼ばれるように山城に隣接する集落である。行政の変遷は、山城と同様な歴史をたどっている。近くには楚南大川が流れ、戦前は、米どころとして知られていた。また、農家はおよそ十世帯に一つの割合で製糖場を所有していたという。数年前、泡瀬にあつた米施設のゴルフ場がここ一帯に移設された時の造成工事の際に製糖場の釜跡や鉄車を回した円形跡、周囲の民家の跡などが出現し往時の生活が偲ばれた。なお、このとき発掘された釜跡は発掘された状態で型をとって石川歴史民俗資料館に保管、展示されている。



(発掘された釜跡)

戦後は米軍に弾薬倉庫の用地として土地が接収され、地域住民のほとんどが移転した。また、周辺が山間盆地ということで倉敷ダムが建設され、集落の一部は水没した。

### 楚南の語源と意味

楚南は『琉球国高究帳』(一六三五四八年ごろ)には「そなん村」とあるが『琉球国由来記』(一七一三年)には「楚南村」として出ている。楚南の語源や意味については、なかなか難解である。楚南の位置、地形、地名用語などから敢て考察すると

一、ソは山城の背後を意味する「背・ソ」で「ナン」は「ナ」の転訛で土地や場所をさす。語源はソナから「そなん」楚南」と表記されるようになり、その意味は「山城の背後にあるところ」ということになるか。

二、中曾根・仲宗根のソネが語源で山の尾根や谷間をさす、とすると楚南の位置や地形と合致する。意味は山の尾根、あるいは谷間にある村ということになる。